

2011.7
No. 19

佐賀大学病院ニュース

患者・医師に選ばれる病院を目指して

News & View

〒849-8501 佐賀市鍋島五丁目1番1号

TEL 0952-31-6511(代)

病院ホームページ <http://www.hospital.med.saga-u.ac.jp/>

病院長挨拶

病院長
宮崎 耕治

平成23年度は未曾有の東日本大震災の支援と復興で幕開けしました。犠牲となられた方々に哀悼の意を捧げるとともに、被災地の一日も早い復興と原発事故の収束を願っています。佐賀大学病院も現地の救護や医療支援に多くの職員に参加して頂きましたが、国立大学病院長会議では、さらに大災害に強い国立大学病院にすることで合意し、災害対策ネットワークを強化することが決定しました。佐賀大学病院は今年でちょうど開院30周年を迎えます。これまで育て支えて頂きました県民の皆様、佐賀県はじめ自治体、医師会、そして近隣の大学病院の方々により御礼申し上げますとともに、これからも県民が佐賀県で誇れる医療を提供できるように前進してまいります。



「東日本大震災」の災害医療支援活動

■災害派遣医療チーム(DMAT)

急性期災害医療支援

DMAT活動について

佐賀大学病院のDMAT派遣準備は震災1時間後にスタートしました。未曾有の大災害を目的の当たりして、何をなすべきかの情報収集がまず必要でした。広域災害救急医療情報システムに加え、九州内や被災地の医療統括の方々との連絡を取り合い準備を進めました。

3/12未明に九州からのDMAT輸送計画が決定、医師2名、看護師2名、事務1名のチームで福岡空港から自衛隊機で飛び立ち、仙台市の陸上自衛隊霞目駐屯地に10時30分に到着しました。上空から見る震災直後の町は荒涼としており、被害の大きさに気が遠くなる思いでした。孤立した被災地から次々にヘリコ

救急医学講座 助教

山下 友子

プターで搬送されてくる方々のトリアージと治療が我々の任務となりました。活動中、計百数十名の方のトリアージを行い、約30名に医療処置が行われました。寒冷環境で全身状態が悪化した高齢の方が多くみられました。

準備段階から派遣中、院内の多くの部門の方々の御支援をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。また、地域の行政や近隣機関との連携の見直し、災害拠点病院としての事前準備や後方支援・受入れ体制の見直しの必要性も強く感じられました。今後の課題として取り組みたいと考えます。

看護部の活動

このたび東日本大震災の医療支援のため、看護部から5名の看護師が被災地へ向かいました。私は災害派遣医療チームの一員として、3/12/3/14まで宮城県霞目駐屯地で活動を行いました。ここで私達は、津波で孤立した地域の方が自衛隊のヘリコプターで着の身着のままの状態に救助される中、避難者の健康状態を迅速に把握し、必要であれば点滴処置を行い病院に搬送しました。

応できるように事前準備は大切であるということに念頭に置き、日々の生活を送っていかうと思えます。最後に、今回の東日本大震災で被災された皆様から御見舞い申し上げます。

救命救急センター

救急看護認定看護師

松下 英代



■医療救護班

1階東病棟看護師

柳川 由子

東日本大震災発生から9日目、医療支援のため佐賀を出発し、11時間の道のりを経て宮城県へ到着しました。

派遣されたのは、宮城県塩釜保健所管内で、避難所を巡回し医療支援を行いました。初めて医療救護班が入った避難所もあり、被災者の方々は不安な気持ちを身体症状と一緒に訴えておられました。「抱っこした子供を津波にさらわれたお母さん」、「津波の中を必死で泳いだという若い女性」、みんな不安や恐怖を抱いたままでした。

今回、私は佐賀県の医療救護班として派遣されましたが、多くの方々が自分の思いを訴える場所もない状態で、今後は「心のケア」のニーズが高まると実感し帰途につきました。

■心のケアチーム

佐賀県心のケアチームの活動を振り返る

精神神経科 講師

溝口 義人

本年3月11日に発生した東日本大震災は広範囲に多くの被害をもたらしました。被災地の状況は時々刻々と変化し、被災者の心身にも様々な変化が生じました。佐賀県は宮城県塩釜保健所管内に心のケアチームを派遣しました。私は心のケアチームの一員として現地で活動しましたが、今回その活動について報告する機会を頂きました。

私が現地に派遣されたのは4月4日から同10日の1週間、震災発生から約1ヵ月後でした。チームのメンバーは石井医師、松島臨床心理士、梅崎看護師、藤田氏(佐賀県)、私の5名でした。派遣先は塩釜保健所管内(2市3町)で

したが、主に多賀城市内で活動しました。同市内の避難所数は10ヶ所、避難者数は2155人(4月4日時点)でした。活動内容は、避難所での相談・診療業務、保健所から依頼されたケースについての個別訪問等で、とくに現地の保健師への引き継ぎは丁寧に行いました。

滞在中、多くの被災者と支援者に出会いました。避難所生活は、真に体験してみないと分からない生活で、避難者の表情には疲れがみられ、その過酷さを感じさせられました。それでも避難者は互いに助け合おうとされています。そればかりか、「わざわざ遠くから来て頂きありがとうございます」

「話を聞いて貰えて嬉しいです」等、私たちに感謝の言葉までかけて下さいました。将来の生活への不安を口に、緊張の続く日々を振り返る避難者の言葉の端々に、自分らしく生きたいという希望を感じて、心打たれました。多賀城市内では、未だに546名が3つの避難所に分かれて生活されています(6月14日時点)。

現地では余震が続き、避難所を揺らしています。福島原発事故は、現在進行中で先行きが見えない大問題です。広範囲の被災地、多くの被災者を想うと、心が痛みます。何かお役に立てることはなからうか、と現地を思いやる日々は続きます。

副病院長 紹介



医療安全担当
後藤 昌昭



経営・再整備担当
森田 茂樹



教育担当
藤本 一眞



労務担当
長谷川 正志

「オール佐賀プログラム葉隠」の紹介

研修医確保に向けた 佐賀県の取り組み

卒後臨床研修センター
副センター長
江村 正

平成16年に卒後臨床研修が必修化され、早いもので、8年目を迎えました。4月から、平成23年度の臨床研修がスタートしましたが、佐賀県全体ではマッチョ数が、前年度の49名から38名へと減少し、1年目の研修医数は減っております。佐賀県の医療を盛り上げるためには、佐賀県の研修医が増え、彼らがその後、県内の病院で学びながら、地域にも貢献していくのが理想的ではないかと考えます。

研修医確保に向け、何か良いアイデアがないかと、県内基幹型5病院（佐賀大学、県立病院、好生館、NH佐賀病院、NH O嬉野医療センター、唐津赤十字病院）と佐賀県とで話し合いを重ね、平成24年度は、基幹型病院（いわゆる研修医が選んだ本拠地の病院）が、お互いを協力型病院として登録し、県内の他の基幹型病院でも研修ができるようなプログラム「オール佐賀プログラム葉隠」を作成しました。各病院定員を2名程度設定しています。県内の全基幹型病院を挙げて、このような全県プログラムができるというのは、画期的な取組であり、うまくいけば、全国のモデルケースとなるでしょう。佐賀県の研修医が一人でも増えることを祈っています。

診療科紹介

血液・腫瘍内科

【概要】

従来日本では、がんの化学療法は各担当科の医師により行われてきました。しかし、欧米では化学療法は専門家としての腫瘍内科が独立して治療にあたり良績をあげています。佐賀大学医学部附属病院では、白血病などの血液疾患のみを対象とする血液内科から、各種固形がんにも対応可能な腫瘍内科を目標し、組織の構築を進めています。

すでに血液疾患のみならず、肺がんおよび一部の消化器がんの化学療法は、血液・腫瘍内科の医師が当たっています。診療体制は、16人の医師（血液専門医8人、呼吸器内科専門医2名、がん薬物療法専門医3名）が専門的な診断・治療を行っています。佐賀大学医学部附属病院がんセンターでは、血液・腫瘍内科とがん治療に関わる各科やコメディカルが集まり、個々に症例を検討するカンサードボードを定期的に開催し、最新の医学的知見に基づいた集学的ながん治療を行っています。また緩和ケア診療班とも密接に連携し、早期から緩和ケアを取り入れることで、少しでも身体的、精神的な苦痛を除いたがん治療を心がけています。

血液・腫瘍内科では、日本成人白血病研究グループ（JAISG）、日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）、西日本がん研究機構（WJOG）、九州肺癌研究機構（JOGIK）など多くの全国的な臨床試験グループに所属し、日本発のエビデンスの確立に努めております。その他の悪性腫瘍についても多施設共同研究に参加し、最新の治療法を提供する体制も心がけています。

【特色・得意分野】

（血液）科長である木村は、血液疾患の分子標的では世界のオピニオンリーダー的な立場にあります。特に慢性骨髄性白血病の基礎・臨床研究を多数行っており、本分野において佐賀大学は日本有数の施設であります。また最近、造血幹細胞移植の経験が400例以上有する一戸が准教授として着任し、同種移植についてもさらに積極的に取り組んでいくことが可能となりましたので、適応検討・セカンドオピニオンなどのご紹介も歓迎いたします。福島講師は、病理も分かる悪性リンパ腫の専門家として活躍をされています。また白血病やフオンウイルスブランド病などの出血性疾患や、プロテインC欠乏症などのまれな血栓性疾患では佐賀県におけるセンター的な役割をはたしています。



診療科長
木村 晋也

（肺がん）荒金診療准教授を中心に、抗がん剤手術、放射線療法を有機的に併用し、高い治療成績を上げております。特に肺がんにおける分子標的薬では、組織を採取することなく血漿のみで肺がん細胞の遺伝子診断を簡便に行う方法を確立し（H23年5月19日、読売新聞に掲載）、臨床応用を開始しています。

（消化器がん）元来、消化器外科医である矢ヶ部医師が、がん薬物療法専門医を取得し、消化器がんの化学療法に当たっています。当院では、手術支援ロボットをはじめ、鏡視下手術を積極的に実施しており、有望な分子標的薬治療が続きと使用されるようになったことから、手術と薬物療法の緊密な連携により、治療成績のみならず、診療の質の向上を目指しています。



文化コーナー

第3回文化コーナーにたくさんのご応募をいただき、誠にありがとうございました。

今回掲載されている優秀作品に選ばれた方々には、賞品としてカッチーくんグッズ（マグカップもしくはくい飲み）を贈呈いたします。また、病院ホームページや外来ロビー等に全作品を掲示しておりますので、是非ご覧ください。このコーナーが一服の清涼剤となれば幸いです。

次回の文化コーナーもたくさんのご応募のほど、宜しく願います。

「夏満喫」(山口県下関市 角島大橋) 吉田結美さん



俳句(木下みね子・万沙羅選)

- リハビリも 小春日和に 後押され
- 夏帽子 空の青さの 眩しさよ
- あじさいの 小雨にぬれて すずしそう
- 夏休み 海でいっばい およぎたい
- うんどう会 リレーのせんしゆに えらばれた

田久保拓 姉さん

飯田政徳さん

山崎初美さん

森田彩橘さん

森花音さん

川柳

- 温かい 家族の思い 頭たれ
- 検診だ お菓子控えて ダイエット
- 辛い時 一人で悩まず ナースにも
- 認知症 新薬出来て 延命か

匿名希望

松尾田鶴子さん

松尾田鶴子さん

白浜末美さん

就任挨拶



生体構造機能学講座
教授
倉岡 晃夫

本年3月16日付けで生体構造機能学講座（解剖学人類学分野）に着任しました倉岡です。昭和63年に九州大学卒業後、耳鼻咽喉科勤務を経て解剖学教員となり、主に肉眼解剖教育に携わって参りました。

正常な人体構造を学ぶ解剖実習は医学教育の根幹を成し、その重要性は百年前と変わっておりません。また実習が篤志献体によって支えられている以上、学生自身が社会との繋がりを深く考え、医師となる自覚を少しでも早い時期に持つことも大切な役割と考えています。実習時間は全国的に減少傾向にありますが、学生諸君の知的好奇心を満たし、最大の教育効果をもたらす解剖実習の模索・実践を通して良医の育成に励んで参る所存です。どうかよろしくお願ひ申し上げます。



重粒子線
がん治療学講座
教授
徳丸 直郎

4月1日付けで重粒子線がん治療学講座（寄附講座）に着任しました徳丸です。平成5年に佐賀医科大学を卒業後、同放射線科に入局し、研修を含め十数年間、佐賀大学附属病院を中心に放射線治療に携わって参りました。重粒子線治療や高精度放射線治療等、近年放射線治療は急速に進歩しています。

鳥栖市に建設中の九州国際重粒子線がん治療センターと協力・協働し、重粒子線治療の発展にお役にたちたいと考えております。また高精度放射線治療の発展にも寄与すべく、当院においてIGRT（画像誘導放射線治療）を本年4月から本格稼働しており、また年度内のIMRT（強度変調放射線治療）の臨床実施を目指しています。関連部署や職種間の連携を密にし、当院や佐賀県のがん治療がさらに充実するよう精進していきたいと存じます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。